

沈黙による行為の遂行 — 語用実践行為の視点から —

Rethinking Silence Based on the Pragmatic Act Theory

種市 瑛

Akira TANEICHI

キーワード

沈黙、言語行為論、ポライトネス理論、語用実践行為

Key Words: Acts of Silence, Speech Act Theory, Politeness Theory, Pragmatic Acts

Abstract: The aim of this paper is two-fold: (1) to critically examine past analyses of silence, and (2) to argue for a new theoretical approach based on the “pragmatic act theory” (Mey, 2001). In spite of the ambiguous nature of silence, most previous studies, particularly “speech act theories” and “politeness research,” try to understand the function of silence with a predominant focus on the speaker’s intention. This paper argues the necessity of reconsidering the function of silence as interactions between interlocutors, and not as acts by the speaker alone. Based on this critique, I present a theoretical framework for analyzing silence, defined as *situated* acts, which “both rely on, and actively create, the situation in which they are realized” (Mey, 2001, p.219). Thus it is often observed in conversation that silence is realized by the hearer rather than the speaker, or that it is difficult to judge who is performing silence. At the same time, interpretations of the functions and the actors of silence differ according to the interlocutors. Situating silence in the flow of actual conversations with their full contexts provides a useful potential for analyzing silence not only from the speaker-hearer dichotomy or the strategies for politeness, but also from a new perspective of silence as having multi-functional and multi-layered practices in our real communications.

1. はじめに

本稿は、沈黙により何がなされているのかを明らかにするために頻繁に用いられてきた「言語行為論 (speech act theory)」(Austin, 1962; Searle, 1969, 1979) や「ポライトネス理論 (politeness theory)」(Brown & Levinson, 1987) に注目し、これらの理論の分析にみられる限界について論じる。この批判のうえで「語用実践行為 (pragmatic act)」(Mey, 2001) に基づく沈黙研究を紹介し、相互行為の視点から沈黙を研究する可能性について考察することを目的とした文献研究を行う。沈黙に対する主要な分析理論を批判的に整理し、考察を深めることは、沈黙の意味解釈を精緻化するうえで重要な役割をもつと考えられる。

先行研究において、沈黙は会話の中でさまざまな働きをもつことが明らかにされている。その中の一つとして、発話と同様に会話参加者の感情や思考を伝達する機能があげられる。沈黙は発話の不在ゆえに、もっとも間接的な伝達行為である (Tannen, 1985, p. 97)。沈黙行為の分析は、発話の分析に用いられる理論的枠組みに基づき行うことが可能とされている¹ (Jaworski, 1993; Saville-Troike, 1985)。言語行為論やポライトネス理論に基づく沈黙研究は多数あるものの、それらは沈黙を話し手の視点から一義的な意味をもつ行為として論じている傾向がある。しかしながら沈黙は、音声をとまなわないので行為者が誰であるのか、また行為がどのような働きをしているのかについてあいまいである。本稿で取り上げる語用実践行為論は、相互行為の中で沈黙にみられる解釈の多義性および多層性を認めることを可能とする理論であり、従来の分析よりも実際の状況に即した沈黙の解釈を提供するといえる。

本稿では、はじめに従来の「言語行為」および「ポライトネス・ストラテジー」としての沈黙にみられる「話し手」中心の解釈について批判的検討を行う。つぎに、「語用実践行為」としての沈黙のとらえ方について Mey (2001) をもとに紹介し、「相互行為」の視点から沈黙を分析することの意義について提示する。以上を通し、分析理論の転換が沈黙研究にもたらす可能性について考察を行う。

2. 話し手の視点に基づく沈黙の分析理論

2.1. 言語行為としての沈黙

人びとは沈黙をすることにより、相手に対して何かを伝えようとすることがある。このような沈黙行為に対して主要な先行研究では、言語行為論²の枠組みをもとに分析が可能とされている (Kurzon, 1998, p. 25; Saville-Troike, 1985, p. 6)。

沈黙をすること (i.e. 「発語行為 (locutionary act)」(Austin, 1962)) は、同時に相手に対して何かを遂行する「発語内 (的) 行為 (illocutionary act)」としての側面ももつ。沈黙者により「発語 (内) の力 (illocutionary force)」が込められた沈黙は、相手の「発語媒介 (的) 行為」(perlocutionary act) を引き起こす³ (Saville-Troike, 1985, p. 6)。発語内 (的) 行為として機能する沈黙は、意識的に行われるのが通常であり、会話を促進したり、停滞させたりする働きがある (Sifianou, 1997, p. 65)。Saville-Troike (1985) は、沈黙に込められる発語 (内) の力として質問や約束、否定、警告、脅し、侮辱、依頼、命令をあげている。また Sobkowiak (1997, p. 46) によると、沈黙は謝罪や拒否、不満、疑問を伝える発語 (内) の力ももちうる。日本人による沈黙について特筆すると、不同意や否定として機能することが頻繁に観察されるといわれている⁴ (Clancy, 1986; Enninger, 1987; Maynard, 1997; Ueda, 1974)。さらに Sifianou (1997,

p.65) は、沈黙は肯定や否定の意を伝えるだけでなく、沈黙者の態度や評価も表すと主張している。

言語行為としての沈黙は、言語や文化に関係なく普遍的に観察される行為である (Jaworski, 1993; Saville-Troike, 1985; Sifianou, 1997)。そのため言語行為論は、さまざまな状況の中で生じる沈黙を分析する枠組みを提供し、異言語間や異文化間のコミュニケーションにみられる働きの比較を可能にした。

だがこの枠組みを用いた沈黙の分析には、議論の余地がある。言語行為論とは、話し手の意図に注目した理論であることが特徴としてあげられる (Mey, 2001; Searle, 1969; Sifianou, 1997; Verschueren, 1999)。Searle (1969, pp.16-17) は、行為の意図性について、以下のように述べている。

When I take a noise or a mark on a piece of paper to be an instance of linguistic communication, as a message, one of the things I must assume is that the noise or mark was produced by a being or beings more or less like myself and produced with certain kinds of intentions. [中略] Furthermore, not only must I assume the noise or mark to have been produced as a result of intentional behavior, but I must also assume that the intentions are of a very special kind peculiar to speech acts. [中略] Only certain kinds of intentions are adequate for the behavior I am calling speech acts.

このような理論的特徴をもつ言語行為論の枠組みに従うと、沈黙の分析は行為者による「意図」という点に焦点が置かれたものとなる。本来、言語行為としての沈黙は、「発語内 (的) 行為」と「発語媒介 (的) 行為」の両方の視点から分析することが可能である (Saville-Troike, 1985, p.6)。しかしながら実際の分析において注目されるのは、「話し手」の発語内 (的) 行為のみであり、「聞き手」による発語媒介 (的) 行為については議論されていないのが現状である。したがって沈黙がどのように解釈されたのかについては、分析の対象から除外されていることになる。このような沈黙研究では、その場面に見られる沈黙の働きを話し手の意図と同義として考えており、沈黙の意味は一義的なものとしてとらえられている。

しかし実際のコミュニケーションを観察すると、沈黙は多義的な解釈が可能な行為である。沈黙は発話をともなわない行為であるため、会話参加者のうち誰が実際の行為者であるのかが不明瞭である。状況によっては、話し手と聞き手の両者が、沈黙者になりうる。そのような行為を発語内 (的) 行為の視点から論じるとは、沈黙が他の会話参加者によってどのように解釈されていたのかという点について説明することができない。会話の中で沈黙が何を意味しているのかを明らかにするためには、話し手だけでなく、「聞き手」とされる沈黙者にも焦点を当てる必要があるといえる。

また言語行為としての沈黙の分析は、その場の状況に基づき行うことも求められる。沈黙による発語内 (的) 行為の遂行は、使用される場面や込められる発語内の力の点について相違が見られ、文化特有の行為でもある (Lehtonen & Sajavaara, 1985, p.199)。Saville-Troike (1985) は、ある特定の「スピーチ・コミュニティ (speech community)」の慣習が、沈黙の伝達内容を決めると述べている (p.10)。加えて同一の文化内であったとしても沈黙は、そこで行われている相互行為の種類や状況によって異なる機能をもつこともある (Lehtonen & Sajavaara, 1985,

p.199)。

以上のことから言語行為論に基づく分析では、「意図」に着目した議論が中心となり、相互行為の中で生じた沈黙の一側面しか明らかにできていないといえる。今後の沈黙研究では、ある状況の中で話し手と聞き手が沈黙をどのようにとらえているのか、および誰が沈黙者であるのかについても考察を深めていくことが求められている。

2.2. ポライトネス・ストラテジーとしての沈黙

先行研究では、沈黙の主要な役割の一つとして話し手と聞き手の良好な人間関係の構築をあげている。このような沈黙は、ポライトネス理論⁵に基づき分析されることが多い。本節では、ポライトネス・ストラテジーとしての沈黙の特徴について論じる。

ポライトネス理論は、会話参加者はフェイスをもち、それを配慮しているということが中心に据えられている。Goffman (1967, p.5) によるとフェイスとは、自己と他者が自身に求める社会的価値のことをさす。話し手と聞き手は、コミュニケーションの中でお互いのフェイスを侵害しないように協力をしている (Goffman, 1967, p.15)。Brown and Levinson (1987) は、Goffman (1967) によるフェイスの概念をすべての人びとがもつ対人関係上の基本的欲求としてとらえ、さらにそれを「ポジティブ・フェイス (positive face)」と「ネガティブ・フェイス (negative face)」の2種類に分類した。ポジティブ・フェイスとは誰かに理解されたいや仲間として認められたいといった他者と距離を縮めたいという欲求をさし、他方、ネガティブ・フェイスとは他者に立ち入れたくないや自分の行動を妨げられたくないといった他者と距離を置きたいという欲求を意味する (Brown & Levinson, 1987, pp.62-64)。

Brown and Levinson (1987) が提示したポライトネス理論の枠組みにおいて沈黙は、「フェイス威嚇行為 (Face Threatening Acts; FTA)」の行使を避けるために用いられると規定されている (p.295)。すなわち沈黙は、相手に対して好ましくない負担や衝突、困惑を与えないようにするための行為になりうる (Brown & Levinson, 1987; Jaworski, 1993; Jaworski & Stephens, 1998; Sifianou, 1997)。FTAを避けるための沈黙は、沈黙者にとって相手への負担を避けるという目的をもつため肯定的な意味合いをもつ⁶ (Sifianou, 1997, p.68)。そのため沈黙は、「FTAをするな (Don't do the FTA)」というストラテジーの一つとして考えられている (Brown & Levinson, 1987)。福田 (2013, p.74) は、この沈黙を「回避的沈黙」と呼んでいる。

沈黙はFTAを避けるためだけでなく、フェイスを侵害する行為としても用いられる (Saville-Troike, 1985; Sifianou, 1997; Tannen, 1985)。FTAは、「オフ・レコード (off-record)」または「オン・レコード (on-record)」として行われる。オフ・レコードとは、間接的な表現技法を用いた行為の遂行である (Brown & Levinson, 1987, pp.211-227)。ほのめかしのようにあいまいで間接的にメッセージを伝える際、沈黙はオフ・レコードとして用いられる (Saville-Troike, 1985; Tannen, 1985)。このような表現技法は、何も言わないことにより、相手の反応を期待する行為でもある。したがってオフ・レコードとして働きかける沈黙は、言語行為として機能するとされる。

それに対してオン・レコードとは、自分の意図を明示的かつ直接的に表現するストラテジーをさす (Brown & Levinson, 1987, pp.94-101)。オン・レコードによる行為の遂行は、さらに相手のフェイスを守る「補償行為 (redressive action)」を行うかどうかで二分され、そして行うならばどのように行うかにより「ポジティブ・ポライトネス (positive politeness)」と「ネガティブ・ポライトネス (negative politeness)」に分かれる。

ポジティブ・ポライトネスとは、相手のポジティブ・フェイスに配慮した戦略であり、相手との距離を縮め、好意や親しみを表す (Brown & Levinson, 1987, pp.101-129)。ポジティブ・ポライトネス・戦略としての沈黙は、尊敬や好意を伝える表現となる (Sifianou, 1997)。しかしながらこのような沈黙は、話すことが比較的重視されている文化に属する人びとのあいだで「有標 (marked)」の行為となっている (Tannen, 1985, p.98)。Tannen (1985) は、イタリア人 (Saunders, 1985) やアメリカ合衆国の黒人 (Gilmore, 1985)、イボ族 (Nwoye, 1985)、ニューヨーク在住のユダヤ人の調査をもとに、これらの人びとは沈黙に対して否定的な価値づけをする傾向があると述べている (Tannen, 1985, p.98)。

それに対してネガティブ・ポライトネスとは、ポジティブ・ポライトネスと対をなしており、相手のネガティブ・フェイスに配慮し、相手と距離を置くような際に用いられる戦略である (Brown & Levinson, 1987, pp.129-211)。沈黙は、不同意を表示する際にネガティブ・ポライトネス・戦略になる (Sifianou, 1997)。この沈黙は、比較的寡黙であると特徴づけられる人びとのあいだで「無標 (unmarked)」の行為とされている (Tannen, 1985, p.98)。Tannen (1985) によると、フィンランド人 (Lehtonen & Sajavaara, 1985) やアサバスカ族 (Scollon, 1985)、ウォームスプリングス先住民 (Philips, 1985) は、沈黙をネガティブ・ポライトネスとして一般的に使用するといわれている。

以上をもとにポライトネス・戦略としての沈黙を図示すると、図 2.1 のとおりになる。

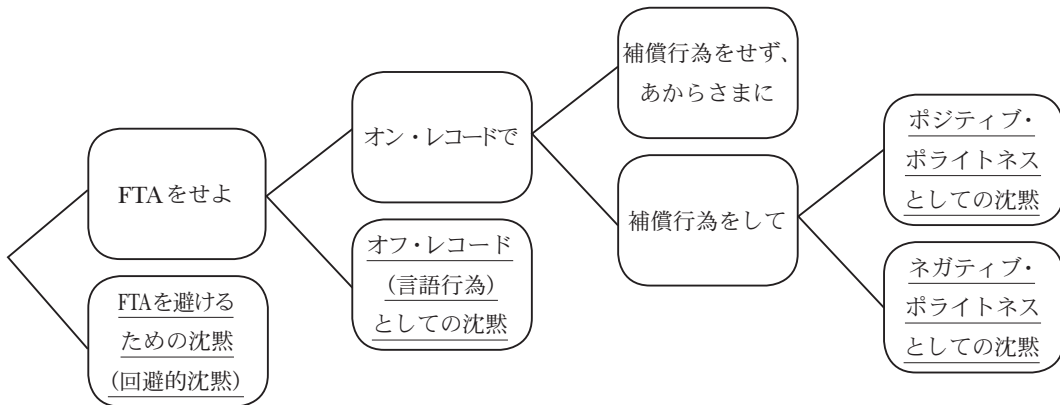


図 2.1 ポライトネス理論に基づく沈黙のとりえ方

Sifianou (1997, pp.68-69) によるとポライトネス理論は、個人間の社会的距離や力の差、負担の度合いに基づき、話し手が沈黙するかどうかといった量の問題や話し手が沈黙に対しどのような意味を付与するかといった質の問題を考えるうえで重要になる。このような量と質の二つの側面から分析可能なポライトネス理論は、特定の文化や社会に属する人びとの沈黙使用を対象とするだけでなく、異文化や異言語のあいだにみられる沈黙行為の比較にも用いられている。たとえば、Nakane (2007) は、オーストラリアの大学で行われている授業内にみられる日本人とオーストラリア人のあいだの会話を分析し、フェイス侵害を避けるために、日本人は沈黙をする一方でオーストラリア人は発話をするを明らかにし、オーストラリア人と日本人のあいだで授業内の沈黙に対する考え方に差異があることを示した。

ポライトネス理論による沈黙研究は、文化や使用言語ごとにみられる沈黙使用の様相を明らか

にすることに貢献している。しかしポライトネス理論は、話し手に焦点が置かれた言語行為論に基づく理論であると指摘されている (Sifianou, 1997, p.71)。つまりポライトネス理論も、話し手が重視されているといえる (Eelen, 2001; Sifianou, 1997)。

ポライトネス理論における話し手中心の様相は、ポライトネス・ストラテジーから見てとれる。Brown and Levinson (1987) に従うと、すべての話し手はある目的を遂行するために複数の異なる手段を比較、検討することでその目的遂行にもっとも適切と考えられる手段を選択する合理性をもつ。話し手は聞き手の反応を予測し、フェイス侵害の深刻度を計算し、どのポライトネス・ストラテジーを行うのかを選択する (Eelen, 2001, pp.96-97)。そのためそれぞれのストラテジーは、たとえば「FTAをするな」のように話し手が意識すべきこととして書かれている。

以上のことからポライトネス理論は、話し手の視点に基づいた理論的枠組みであることがわかる。そのため「話し手」が沈黙者であることを意味し、聞き手とされる沈黙者が想定されていないことが特徴としてあげられる。聞き手不在の議論では、沈黙が実際の会話においてどのように機能したのかという点が捨象されている。このことからポライトネス理論に基づく分析では、実際のコミュニケーションの中で生じた沈黙の一部分しか把握できないといえる。

3. 相互行為の視点に基づく沈黙の分析理論

前節の議論により言語行為論やポライトネス理論を用いた分析では、沈黙を話し手による行為として位置づけていることが明らかとなった。また意図という視点から沈黙を論じているため、沈黙が一義的な解釈しかされていない現状がある。沈黙は、話し手と聞き手が共に何も話さないことにより生じるため、誰が行為者であるのかが非常にあいまいである。加えて会話中の沈黙の働きにも、多義性がみられる。本稿ではこれらを批判的にとらえ、「語用実践行為」に基づく沈黙研究を紹介し、話し手を越える相互行為という視点から沈黙をとらえ直すことを試みる。

語用実践行為論とは、Jacob L. Meyにより考案され、近年、語用論の分野で注目を集めている行為論の一つである⁷。この行為論についてMeyは、つぎのように説明している。

My point of departure is that no speech act is viable by itself. Speech acts as such do not exist, unless they are situated, which means that they cannot be said to have a unique reference, based on their linguistic (semantic) content: the same speech act can function in a multitude of ways, as the case of indirect speech acting shows. (Mey, 2010, p.2882)

加えてMey (2001) は、“Speech acts, in order to be effective, have to be *situated*. That is to say, they both rely on, and actively create, the situation in which they are realized.” (p.219, [強調原文]) と主張している。すなわちMey (2001, 2010) は、言語行為は相互行為の中であってさまざまな機能をもつことが可能であると指摘するのみならず、「話し手」の「意図」に焦点が置かれた言語行為論による行為のとらえ方を批判し、行為の「状況」を参照することの重要性を説いている。言語行為論は、それが実現している状況に依存するだけでなく、そうした状況を創り出す力をももっているということである。

以上の議論をもとに考案されたのが、語用実践行為論である。この枠組みにおいて行為は、話し手だけでなく相互行為の行われている状況を踏まえとらえられる。この点についてMeyは、

以下のように述べている。

The theory of pragmatic acts does not try to explain language use from the inside out, that is, from words having their origin in a sovereign speaker and going out to an equally sovereign hearer (who then may become another sovereign speaker, and so on and so forth). Rather, its explanatory movement is from the outside in: the focus is on the entire environment in which both speaker and hearer find their affordances, such that the entire situation is brought to bear on what can be said in the situation, as well as on what is actually being said. (Mey, 2001, p.221)

この考え方は、言語行為論だけでなく、話し手の視点に基づくポライトネス・ストラテジーとしての行為の解釈に対してもあてはまる。話し手中心の行為論では、その行為を取り囲む聞き手や状況が捨象されてしまうため、何がポライトネスであるのかについては、同意しにくい。これは、状況や参加者によってポライトネス自体が異なりうるからである。したがってポライトネス理論も言語行為論と同様に、行為に込められた話し手の意図という力からではなく、会話参加者や状況といった行為の外部にある要素から行為に迫る必要がある⁸。

語用実践行為論のとらえ方は、沈黙を解釈するうえで非常に効果的であると考えられる。Jaworski (1993) や Saville-Troike (1985) は、沈黙は相互行為が行われている状況の中で機能すると述べている。したがって沈黙により何が行われているのかを同定するためには、沈黙が生じたコンテキストとの関係性が重要である (Nakane, 2007, p.27)。また Saville-Toike (1985, p.11) は、沈黙の解釈は発話以上にコンテキストに依存すると述べている。したがって沈黙は、従来の話し手の意図に焦点を当てた言語行為論やポライトネス理論としてとらえるよりも、語用実践行為論の中に位置づけるほうがより実際の相互行為に根ざした解釈を提供できることは明らかである。

Saville-Troike (1985, p.15) は、Hymes (1974) のコミュニケーションの民族誌⁹の考え方に基づき、「いつ」、「どこで」、「誰によって」、「誰に対して」、「どのような方法で」、「どのような状況の中で」、「何に」について話さなかったのかに注目し、沈黙をとらえている。同一のスピーチ・コミュニティに属する人びとは、その文化特有の沈黙の使用方法を共有している傾向がある¹⁰ (Saville-Troike, 1985; Enninger, 1987; Jaworski, 1993)。そのため沈黙がたとえ類似した発話事象にみられたとしても、その解釈はおのおのの言語地域社会によって異なることがありうる。このような文化的、および言語的コンテキスト依存性をもつ沈黙が異文化間コミュニケーションの場面に生じると、異なる文化に属する人びとに誤解を招く可能性がある (Nakane, 2007, p.31)。また沈黙に対する認識の相違は、否定的なステレオタイプを生み出す原因となりうる (Scollon, 1985; Scollon & Scollon, 1981, 1983)。

非ネイティブ・アメリカ人とアサバスカ族の会話にみられる沈黙を例にあげると、ターンとターンのあいだにみられる長い沈黙に対して異なる意味づけがなされている。非ネイティブ・アメリカ人はアサバスカ族が行う長い沈黙を会話が進んでいない要因としてとらえている (Scollon, 1985)。それに対しアサバスカ族は、非ネイティブ・アメリカ人が発話を多く行い、沈黙をしないように努めることから、後者が支配的であり、無礼であるととらえている (Scollon & Scollon, 1981)。したがって両者は、沈黙に対してそれぞれの言語地域社会での考え方をもとに意味づけを行なっている。

沈黙に対する認識の差異は、異文化間コミュニケーションの場面だけでなく同じ言語文化に属する人びとのあいだでも生じることがある。沈黙は、ある文化的コンテキストの中で何が期待されているのかにより、同一の文化に属する人びと同士の間であっても肯定的にも否定的にもとらえられうる (Tannen, 1985, p.98)。たとえば Tannen (1985) は、アメリカ白人社会の中でもニューヨークの人たちとカリフォルニアの人たちのあいだで、発話と沈黙に対する価値づけが異なることを示した。ニューヨークの人びとは、間を置きながらゆっくりと発話するカリフォルニアの人たちを控えめで、非協力的であり、社会的ではないと認識している。それに対してカリフォルニアの人びとは、矢継ぎ早に発話を行うニューヨークの人たちについて会話に対して支配的であるといった印象をもっている。

以上のことから沈黙は、異文化間コミュニケーションだけでなく同文化内コミュニケーションにおいても解釈に相違が生じる行為である。そのような行為は、相互行為の行われている「いま・ここ」の状況やそうした会話の参加者の視点からとらえることが必要となるのである。沈黙の使用や意味づけにみられる社会的、文化的依存性について Mey は、以下のとおり述べている。

[T]he act of keeping silent (we can hardly call it a 'speech act') is highly dependent, as to its interpretation, on the cultural context in which it is performed or 'uttered'. Just as regular speech acts need a proper context of utterance to be validly performed, the act of silence doesn't properly make sense unless it is *situated*, as to both its linguistic and its cultural context. We may go one step further, and say that it is the context of culture and language which 'sets up' the language user to deal with a particular act of speaking (or non-speaking, as the case maybe). [中略] [T]he 'speech act' of non-speaking doesn't make sense unless it is pragmatically founded in the social set-up of the language users. (Mey, 2001, p. 279, [強調原文])

状況依存性の高い沈黙は、それを取り囲む社会的、文化的、そして言語的要因を考慮に入れることにより解釈が可能となる。従来の研究は、話し手の意図に焦点が当てられていたことにより、沈黙の議論が十分であったとは言い難い。沈黙にみられる状況依存性を考慮に入れると、沈黙を語用実践行為としてとらえることが適切であることが明白となる。

語用実践行為論の枠組みに従うと沈黙は、「語用実践素 (pragmeme)」として扱われる。語用実践素とは、相互行為の中でコンテキストにより状況づけられ、意味が付与される行為をさす (Mey, 2001, p. 221)。Capone は、語用実践素を具体的に以下のように定義している。

A pragmeme is a situated speech act in which the rules of language and of society synergize in determining meaning, intended as a socially recognized object, sensitive to social expectations about the situation in which the utterance to be interpreted is embedded. (Capone, 2005, p. 1357)

さらに Mey (2001, p. 221) によれば、ある状況の中で実際に事例として現れる個々の語用実践素は、「語用実践体 (pract)」と呼ばれ、さらにそれらは同一の状況が存在しないのと同じようにすべてが異なる行為でもあるため同時に「語用実践異体 (allopract)」としても扱われる。そのような語用実践体は、それがどのようなものであり、どのようなものでありえないのかを事前に予

測することはできないとされる (Mey, 2001, p.221)。また語用実践体は、個々の会話参加者たちがもつその状況に対する理解、およびその行為がその場で果たしていると考えられる効果によってのみ解釈することができる (Mey, 2001, p.221)。このように語用実践体とは、ある状況の中で「その場で何が行われた」と会話参加者によりとらえられているのみに焦点が置かれているのである。

以上のような考え方をすることにより、沈黙を多義的であり、多層的な意味をもつ行為としてとらえることが可能になる。従来の行為論において沈黙は、意図に注目をしていることにより一義的な解釈がなされる傾向がみられた。しかしながら語用実践行為論の枠組みに基づく、相互行為の中でみられる沈黙の働きを多角的な視点からとらえられる。たとえば会話において沈黙は、沈黙者のメッセージを伝える行為であると同時に話者交替の合図にもなりえる。このような解釈のされ方は、従来の研究において見落とされる傾向があった。相互行為の中で沈黙をとらえることにより、沈黙の働きをより詳細にとらえることが可能になる。

加えて語用実践行為論の枠組みは、沈黙をより動的な意味をもつ行為としてとらえることを可能とする。その場で何が行われたのかは、必ずしも行為が生じる前の行為や状況だけをもとに判断することができない。実際の会話では、あとに続く行為や状況が前に行われた行為を意味づけることもある。したがって行為の意味は、相互行為が進む過程で変化しうるといえる。このように沈黙を動的な意味をもつ行為としてとらえることは、話し手の意図に注目した言語行為論やポライトネス理論による解釈にみられず、実際のコミュニケーションにより即した解釈をするためには、動的な流れの中で沈黙をとらえる必要があると考えられる。

4. 総論

本稿では、行為としての沈黙の分析に一般的に用いられてきた言語行為論やポライトネス理論にみられる特徴をあげるとともに、それらの理論に基づく分析に対して批判的検討を行なった。従来の言語行為論やポライトネス理論では、沈黙を話し手の意図という視点から解釈している。そのため「聞き手」による解釈やその場の「状況」がどのようなものであったのかという議論は、あまりされていないのが現状である。このような分析は話し手に基づく沈黙の意味に焦点化されるため、実際の相互行為にみられる沈黙の一側面しかとらえていないといえる。

沈黙は、相互行為の中で行為者や行為の意味が多義的であり、多層的な行為である。沈黙の多義性や多層性は、何が行われたのかだけでなく、誰により遂行されたのかという二つの点に及ぶ。このような特徴を踏まえ本稿では、「語用実践行為」としての沈黙を紹介した。語用実践行為として沈黙を再考することにより、従来の一義的に解釈される傾向にあった沈黙についての分析を話し手だけでなく、他の会話参加者やその場の状況という視点からより実際の相互行為に即して行うことができるようになる。

話し手から相互行為へと分析の視点を転換させることは、沈黙者や沈黙の働きを分析するための枠組みの構築に大きな貢献をもたらすと考えられる。同一の沈黙であってもその解釈は、話し手と聞き手のような「会話参加者」のあいだでも異なりうる。また会話に参加をしていないが沈黙を解釈するトランスクリプト作成者や研究者などの「非会話参加者」のあいだでも異なることがあるだろう。加えて「会話参加者」と「非会話参加者」のあいだでも、同一の沈黙に対して異なる意味づけを行うこともありえる。語用実践行為として沈黙をとらえた場合、それぞれの立場の人からみた解釈を導くことが可能となり、それぞれがもつ解釈の視点を得ることも可能となる。

それらの視点は、沈黙の解釈枠組みを構築するうえで重要な要素となる。

今後、語用実践行為として沈黙をみるうえで、「行為者」や「行為の働き」に注目したさらなる分析が求められるだろう。誰が沈黙者であるのかやどのような働きが沈黙にみられるのかという問題は、会話参与者や研究者のあいだでも異なる可能性がある。それぞれの人びとの解釈にみられる共通点や相違点を明らかにすることで、沈黙の解釈の枠組みの構築をめざす。

註

- 1 沈黙を分析することに特化した理論は、現在のところ、考案されていない。しかしながら、沈黙に限定した理論の不在は、大きな問題にはならない。それは、沈黙と発話は、音声の有無という形式的な面では、対比をなしているものの、両者が会話の中で果たしている機能の面では、類似をしているからである。このような考えに基づき、先行研究では、沈黙の機能を明らかにするために、言葉の機能を分析するために用いられている理論が、一般的に使われている。本稿で中心的に扱う「言語行為論」や「ポライトネス理論」以外にも、たとえば、「関連性理論 (relevance theory)」(Spelber & Wilson, 1986) を用いた論考 (e.g. Jaworski, 1993) や「有標理論 (markedness theory)」による考察 (e.g. Sobkowiak, 1997) などもあげられる。
- 2 一部の沈黙研究者は、言語行為とは呼ばず、「コミュニケーション行為 (communicative act)」という呼称を用いている (e.g. Lebra, 2007[1987]; Saville-Troike, 1985)。この呼び方の相違は、発話をともなわない沈黙を「言語 (speech)」としてみなすことへの疑問に起因する。だが「コミュニケーション行為」と称する先行研究であっても、そこにみられる理論的枠組みはAustinやSearleによる「言語行為論」の考え方を踏襲している。したがって「コミュニケーション行為」と「言語行為」のあいだに、沈黙に対する考察の仕方に相違はみられない。以上を踏まえ本稿では、先行研究の中で「コミュニケーション行為」という用語が用いられていたとしても、「言語行為」に表記を統一し、議論を進める。
- 3 言語行為論の用語は、発話という行為をとらえるために名づけられている。そのため「発語行為」や「発語内(的)行為」、「発語(内)の力」、「発語媒介(的)行為」、「発語媒介結果」のように「発語」という用語が頻繁に用いられている。しかしながら発話をともなわない沈黙の場合、「発語」を含む用語を使用することは適切ではないと考えられる (Saville-Troike, 1985, p.6)。本研究では、以上のことを承知のうえで、既存の用語に修正を加えずに記す。
- 4 ただし不同意と否定を伝える沈黙は、日本人だけが行う特有の行為ではない (Nakane, 2007, p.27)。
- 5 ポライトネス理論は、さまざまな研究者によって提唱され、議論が展開されている。沈黙に関する主要な先行研究では、中でもBrown and Levinson (1987) によるポライトネス理論が多く用いられている。したがって本研究では、ポライトネス理論とはBrown and Levinsonが提示した理論をさし、議論を進めていく。
- 6 一方でこのように沈黙は、沈黙の受け手がその沈黙に対して高度な推論を働かせる必要があるため、もともと丁寧でない行為ともみなすことが可能である (Sifianou, 1997, p.73)。
- 7 2010年には、*Journal of Pragmatics* (volume 42, issue 11) にて“Pragmemes”という名称で、語用実践行為についての特集号が組まれている。
- 8 ただし本研究は、意図に基づく行為の解釈を完全に否定するわけではないことを付記する。先行研究において語用実践行為としての行為は、コンテキストや状況だけでなく、行為者の意図も重要なことがあると述べられている (e.g. Capone, 2010; Montiminy, 2010)。Meyの語用実践行為の考え方を継ぐAlessandro Caponeは、行為者の意図について以下のとおり述べている。

Intentionality is a mental phenomenon: it is usually a mental cause that prompts either linguistic or nonlinguistic actions. Linguistic intentionality is what animates a speech act: it is the reason why the speech act is proffered as well as the intended consequence of the speech act. If all goes well, and the speaker's communicative purpose is understood properly, the addressee will fulfil that purpose. 'Intention' originally meant 'aiming at'. So, it is reasonable that an utterance should aim at something (its purpose) and be fulfilled if the purpose is

taken up. [中略] While Mey specifically deals with speech act force and claims that this is a function of context (he calls the speech act in context 'pragmeme'), I deal with the issue of the speaker's/author's intentionality and I address the question: whose voice is the one expressed in a speech act? I propose that Mey's notion of the pragmeme must encompass not only illocutionary force but also intentionality, as well as the phenomenon of voicing (see Capone, forthcoming). (Capone, 2010, p.2965)

上記のCapone (2010)の主張も加味し、本項では語用実践行為を考える際に状況だけでなく行為者の意図も考慮することにする。

- 9 Mey (2001, p.219)は、語用実践行為に基づく行為のとらえ方は、Hymes (1974)が提示した「発話事象 (speech event)」の考え方とくに類似すると述べている。発話事象とは、発話を行うための規則によって支配される活動のことをさす (Hymes, 1974, p.52)。このような規則に支配された発話事象には、その場で期待される発話や動作があり、その行為を行うことにより会話参加者のあいだで共有された意味をもつ。それに対して語用実践行為論は、ある状況の中で特定の行為が規定されるだけでなく、その行為を行うことによりその状況を再生産する働きをもつ (Mey, 2010, p.2883)。
- 10 このことは、いくつかの先行研究でも例証されている (e.g. Agyekum, 2002; Basso, 1990 [1972]; Nwoye, 1985; Saunders, 1985; Scollon & Scollon, 1983)。ただしこのような議論は、「文化」を一元的にとらえているため批判もある。沈黙の解釈は、後述のとおり、同一の文化内であっても異なりうる。したがって「文化」にのみ依拠した沈黙の議論は、避ける必要がある。

参考文献

- Agyekum, K. (2002). The communicative role of silence in Akan. *Pragmatics*, 12 (1), 31-52.
- Austin, J. L. (1962). *How to do things with words*. Cambridge: Harvard University Press.
- Basso, K. (1990[1972]). To give up on words: Silence in Western Apache culture. In D. Carbaugh (Ed.), *Cultural communication and intercultural contact* (pp.303-320). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Capone, A. (2005). Pragmemes (a study with reference to English and Italian). *Journal of Pragmatics*, 37 (9), 1355-1371.
- Capone, A. (2010). Barack Obama's South Carolina speech. *Journal of Pragmatics*, 42 (11), 2964-2977.
- Clancy, P. (1986). The acquisition of communicative style in Japanese. In B. Schieffelin & E. Ochs (Eds.), *Language socialization across cultures* (pp.213-250). Cambridge: Cambridge University Press.
- Eelen, G. (2001). *A critique of politeness theories*. London: Routledge.
- Enninger, W. (1987). What interactants do with non-talk across cultures. In K. Knapp, W. Enninger, & A. Knapp-Potthoff (Eds.), *Analyzing intercultural communication* (pp.269-302). Berlin: Mouton de Gruyter.
- 福田一雄 (2013). 『対人関係の言語学—ポライトネスからの眺め—』開拓社.
- Gilmore, P. (1985). Silence and sulking: Emotional display in the classroom. In D. Tannen & M. Saville-Troike (Eds.), *Perspectives on silence* (pp.139-162). Norwood, NJ: Ablex.
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. Garden City, NY: Doubleday.
- Hymes, D. (1974). *Foundation in sociolinguistics: An ethnographic approach*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Jaworski, A. (1993). *The power of silence: Social and pragmatic perspectives*. Newbury Park, CA: Sage.
- Jaworski, A. & Stephens, D. (1998). Self-reports on silence as a face-saving strategy by people with impairment. *International Journal of Applied Linguistics*, 8 (1), 61-80.
- Kurzon, D. (1998). *Discourse of silence*. Philadelphia: John Benjamins.
- Lebra, T. S. (2007[1987]). The cultural significance of silence in Japanese communication. In T. S.

- Lebra (Ed.), *Identity, gender, and status in Japan: Collected papers of Takie Lebra* (pp.115-126). Folkestone, UK: Global Oriental.
- Lehtonen, J. & Sajavaara, K. (1985). The silent Finn. In D. Tannen & M. Saville-Troike (Eds.), *Perspectives on silence* (pp.193-201). Norwood, NJ: Ablex.
- Maynard, S. K. (1997). *Japanese communication: Language and thought in context*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Mey, J. L. (2001). *Pragmatics: An introduction* (2nd ed.). Cambridge: Blackwell.
- Mey, J. L. (2010). Reference and the pragmeme. *Journal of Pragmatics*, 42 (11), 2882-2888.
- Montminy, M. (2010). Context and communication: A defense of intentionalism. *Journal of Pragmatics*, 42 (11), 2910-2918.
- Nakane, I. (2007). *Silence in intercultural communication*. Amsterdam: John Benjamins.
- Nwoye, G. (1985). Eloquent silence among the Igbo of Nigeria. In D. Tannen & M. Saville-Troike (Eds.), *Perspectives on silence* (pp.185-191). Norwood, NJ: Ablex.
- Philips, S. U. (1985). Interaction structured through talk and interaction structured through 'silence'. In D. Tannen & M. Saville-Troike (Eds.), *Perspectives on silence* (pp.205-213). Norwood, NJ: Ablex.
- Saunders, G. R. (1985). Silence and noise as emotion management styles: An Italian case. In D. Tannen & M. Saville-Troike (Eds.), *Perspectives on silence* (pp.165-183). Norwood, NJ: Ablex.
- Saville-Troike, M. (1985). The place of silence in an integrated theory of communication. In D. Tannen & M. Saville-Troike (Eds.), *Perspectives on silence* (pp.3-18). Norwood, NJ: Ablex.
- Scollon, R. (1985). The machine stops. In D. Tannen & M. Saville-Troike (Eds.), *Perspectives on silence* (pp.21-30). Norwood, NJ: Ablex.
- Scollon, R. & Scollon, S. W. (1981). *Narrative, literacy, and face in interethnic communication*. Norwood, NJ: Ablex.
- Scollon, R. & Scollon, S. W. (1983). Face in interethnic communication. In J. Richards & R. Schmidt (Eds.), *Language and communication* (pp.156-188). London: Longman.
- Searle, J. R. (1969). *Speech acts: An essay in the philosophy of language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J. R. (1979). *Expression and meaning: Studies in the theory of speech acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sifianou, M. (1997). Silence and politeness. In A. Jaworski (Ed.), *Silence: Interdisciplinary perspectives* (pp.63-84). New York: Mouton de Gruyter.
- Sobkowiak, W. (1997). Silence and markedness theory. In A. Jaworski (Ed.), *Silence: Interdisciplinary perspectives* (pp.39-61). New York: Mouton de Gruyter.
- Spelber, D. & Wilson, D. (1986). *Relevance: Communication and cognition*. Oxford: Basil Blackwell.
- Tannen, D. (1985). Silence: Anything but. In D. Tannen & M. Saville-Troike (Eds.), *Perspectives on silence* (pp.93-111). Norwood, NJ: Ablex.
- Ueda, K. (1974). Sixteen ways to avoid saying 'no' in Japan. In J. C. Condon & M. Saito (Eds.), *Intercultural encounters with Japan: Communication-contact and conflict* (pp.185-192). Tokyo: Simul Press.
- Verschueren, J. (1999). *Understanding pragmatics*. London: Edward Arnold.